

# 大空 (生徒・保護者向け) 52号

宮崎県立宮崎西高校・宮崎県立宮崎西高等学校附属中学校 校長通信

令和3年11月11日(木)

## 裸でも生きる—様々な「分人」を生きた人 山口絵理子氏—

### □本日の概要

- 1 山口絵理子氏は、中高で柔道を極めながら、慶応大学進学後、マザーハウスという会社を企業し、発展途上国の応援をしている人物である。彼女の情熱的な生き方には感動を覚える。
- 2 彼女の行動力、精神力を支えているのは、柔道で培った分人だと考えることができる。今、一生懸命取り組んでいることや、これから取り組むことを大切にしたい。
- 3 中高生という時代は、土を耕し、せつせと養分をため込んでいる時であり、将来、自分にどんな芽が出て、どんな花が咲くかは分からない。自分の中の、様々な分人を大切に、じっくり育てて欲しい。
- 4 本日のNFC 感性 行動力 自他肯定力 想像力

### □山口絵理子さんの生き方



株式会社マザーハウス代表取締役社長  
山口絵理子

1981年、埼玉県生まれ。小学生時代にいじめに遭い、中学ではその反動から非行に走る。中2で柔道を始めたことで、更生。柔道を極めるため、大宮工業高校に女子部設立を嘆願し、進学。最後の大会で、全国7位となる。柔道人生とはここで別れ。半年間必死で受験勉強に取り組み、慶應義塾大学総合政策学部へ。大学

4年次、ワシントンにある国際機関でインターンを経験。大学卒業後、単身バングラデシュに渡り、BRAC大学院開発学部修士課程に入学。現地でも夜間の大学院に通いながら、日本の大手商社のダッカ事務所にてインターン。商社の仕事で訪れた見本市会場で、ジュートバッグと出逢う。自ら描き起したデザイン画と、バイトで溜めた資金を携え、現地工場との生産交渉を開始。幾多のハードルを乗り越え、完成した160個のバッグを持ち帰り、2006年3月、株式会社マザーハウスを起業。現在も、ビジネスを通じた健全で持続可能な途上国支援のために走り続けている。「フジサンケイ女性起業家支援プロジェクト 2006」最優秀賞受賞。2012年、内閣府から「世界で活躍し『日本』を発信する日本人」の一人に選ばれる。著書に『裸でも生きる』(講談社)がある。

写真の女性が山口絵理子さんです。彼女の略歴を読んだだけでも驚きませんか。「工業高校出身で高校時代は全国7位の柔道選手」「若干25才でマザーハウスというバッグ製造会社を設立した女性起業家」などと紹介されますと、いったいどんな人なのだろうと思ってしまいますが、実際の彼女は、じつにチャーミングな女性です。私は彼女の著書「裸でも生きる1、2」を読み、彼女の生き様に感動を覚えたので、紹介します。

- 1 小学生時代いじめに遭い、中学で非行に

山口さんが生まれたのは埼玉県の大宮(現・さいたま市)です。山口さんは、小学校でいじめに遭って、学校に行けなくなった時期があります。彼女は、家を出るものの通学路をうろろろするだけでした。そして、「もっと強くなりたい」「大人になったら楽しい学校をつくりたい」と考えていました。

小学校時代の反動で、山口さんは中学で非行に走ります。そんな彼女が更正するきっかけになったのは柔道です。柔道部の顧問の先生は、山口さんにタバコを吸わない、茶髪はやめる、などの30個以上のルールを守らせました。柔道を始めたおかげで、彼女は更生し、練習に励んだ結果、中学3年の最後の大会では、何と県で優勝、全国でベスト16の結果を残す選手になったのでした。

### 2 高校時代、柔道に必死で取り組み全国7位に

山口さんは埼玉で一番強かった埼玉栄高校の女子柔道部からスカウトされます。しかし、山口さんは敢えて厳しい道を選び、男子柔道部しかないけれど、県で最強と言われていた大宮工業高校に進学します。山口さんは中学卒業までに何度も大宮工業に通い、顧問の先生にお願いして女子部をつくってもらう許可をいただきました。

山口さんは、大宮工業で柔道に打ち込みます。女子部といっても、部員は山口さんひとりきり、100キロを超える男子選手を相手に、練習漬けの毎日でした。鼻の骨は2回折り、指もつぶし、膝のじん帯も数回切る、壮絶な練習でした。失敗をして、先輩から殴られることもありましたが、それでも、高校3年の最後の大会で、関東大会で2位になり、武道館で行われた全国大会では7位に食い込むのです。

### 3 大学進学を決意～工業高校から慶応大学へ～

高校3年の夏が終わると、同級生たちは国士舘大学など柔道の強い大学を目指したり、警察や警備会社への就職を目指したりしました。でも、山口さんは、高校3年になって、将来、自分が進むべき道を探し始めます。もっと広く社会を知る必要があると思った山口さんは、進学を志しますが、ここでも彼女は敢えて厳しい道を選び、できるだけ難しい大学へ進もうと決意するのです。ところが、工業高校の授業は実技が多く、大学進学に対応していません。また、ほとんど勉強をしてこなかった彼女には基礎力がないのです。

高校3年の夏からの勉強開始というハンディがあるため、山口さんは、2教科か1教科の試験で受験できる大学を探します。そして、英語と数学だけに絞って必死で受験勉強に励みました。結果としては、早稲田と青山学院に不合格で、推薦入試で慶應義塾大学の総合政策学部合格します。これも考えられない快挙です。

大学に進学し、彼女は衝撃を受けます。柔道一色の、勉強とかけ離れた生活を送っていた彼女にとって、本当に住む世界が違う人たちばかりだったのです。普通に英語で会話している人がいたり、コンピュータソフトをつくっているという人もいます。最初は、皆の話している言葉が分からない、そんな日々でした。

それでも、彼女はくじけません。とにかくあらゆるものにチャレンジします。大学1年生の時には議員秘書やウグイス嬢のアルバイトにも参加します。このように自分の将来を模索していた時、竹中平蔵先生が担当していた開発経済学の授業を受け、そこから、発展途上国に興味を持つようになりま

す。貧しい国に生まれたという理由だけで、学校に行けない子どもが世界にはたくさんいる、その事実には山口さんは衝撃を受けます。そんな国を豊かにするためには何が必要なのか。その答えを探するために、山口さんは、開発経済、哲学や思想に関する本を読みあさるようになりました。そして無理だと思いつつ、ワシントンにある米州開発銀行のインターン選抜試験に応募し、何とか合格します。そして、大学4年の春から約4カ月間、途上国援助トップといわれる開発銀行の予算戦略本部で働くことになるのです。

#### 4 ジュートとの出逢い～慶應義塾大学を卒業後、単身、バングラデシュへ～

開発銀行のスタッフは、世界から貧困をなくしたいという尊い志を持っていました。でも、途上国の現場、実状をよく知らないまま仕事をしていました。それでは、本当に正しい支援ができないのではないか。そんな思いがふくらんだ山口さんは、アジアで一番GDPが低いといわれるバングラデシュという国の実状を自分の目で見ようと思いつきました。

バングラデシュは山口さんの想像以上でした。山口さんは、まず空港の異様なにおいや物乞いの群衆に驚きます。山口さんは、ベンガル語など話せません。恐怖と驚きの中、バックパッカー感覚で1週間ほどすごしますが、やがて彼女は、このままではバングラデシュのことをまったく理解できないことに気づきます。毎日24時間、この国のために自分ができるところをひたすら考えた山口さんは、思い立って、現地の大学院への進学を決意します。

山口さんは、バングラデシュでの生活で途上国の実状を知り、大学院で修士課程を修了し、開発銀行に戻り、正しい途上国援助の政策を提案していこうと考えたのです。山口さんは頼み込んで大学院の入試を受けさせてもらい、何とか合格します。

バングラデシュの大学院に進学した山口さんは、昼間は日本商社の現地事務所でインターン、17時半から22時半までが大学院の授業を受け、夜はリキシャで帰宅する、そんな毎日でした。ダッカでは18時以降、女性の外出が禁止されており、夜道は身の危険がありました。山口さんは一所懸命言葉を覚え、勉強し、生活を続けていきます。その時、商社の仕事の関係で訪れたある見本市会場で、ジュート（黄麻）という素材に出逢います。

#### 5 マザーハウスの誕生

“ジュート”といってもピンとこないかもしれませんが、コーヒー豆などを運ぶ際に使われる袋の素材といえば、見たことがあるでしょう。ジュートは麻の一種です。山口さんが現地の見本市会場で目にしたのは、ジュート製のバッグでした。ジュートを調べてみると、普通の植物の5、6倍の二酸化炭素を吸収し、廃棄時に有毒ガスを一切出さず肥料としても使える、地球環境にとってもやさしい素材ということがわかりました。そして、インド・バングラデシュが世界の総輸出品量の90%を占めているジュート大国だということも分かったのです。山口さんは、「これだ！」と直感します。まずインターン先である商社の仕事として、ジュート製のショッピングバッグをつくり、関連会社のコンビニやスーパーで使ってもらう計画を立てました。現地事務所に事業計画を進める許可をもらい、ダッカから車で6時間ほどかかる工場に何度も通い、工場のスタッフたちと交渉しながらサンプルが完成します。

彼女には新しい夢が生まれます。バングラデシュが世界に誇るジュートを使って、日本人が買いたくなるような最高品質のバッグをつくらう！それが実現すれば援助や寄付ではなく、健全で持続的な経済基盤の提供というかたちで貧困の解消に協力できる。山口さんは尊敬するマザー・テレサの名前を拝借し、バッグを売るための会社、株式会社マザーハウスを2006年3月に設立しました。

#### 6 国内でバッグの販売を開始～飛び込み営業

最初はバッグを家族や親族、友人に買ってもらうことか

ら始めました。その後、バッグを扱っていきそうな路面店に飛び込み営業をスタートします。その後、縁あって東急ハンズに扱ってもらえるようになります。

山口さんに興味を持った『日経アソシエ』が4ページの特集記事を組んでくれ、それがきっかけとなってテレビ番組の『情熱大陸』に山口さんが出演することになります。メディアの後押しと、自分のブログからの反響で、いっせいに卸先が増え、問い合わせもどんどん入るようになります。

そして、2007年8月、山口さんは、東京の上野に最初の直営店をオープンするに至ります。その後、3年で直営店は5店舗に増え、今は販売店は日本だけでなく世界中に広がっています。最初は1つのバッグの製作・販売から始まったマザーハウスの商品は、現在はジュートだけではなく、バングラデシュのレザーなどの素材も加わって、マザーハウスの売り上げは、2015年度1億6000万円になっています。また、マザーハウスは、バングラデシュだけに限らず、アジアを中心とした途上国で様々な支援活動を進めています。貧困層の子どもたちにスクールバッグを配布したり、サイクロン被害地の現地支援などを行っています。プライベートでは結婚もされてお子さんもいるようで、母親業と仕事を両立させながら頑張っているようです。

#### 口彼女の情熱を育てたもの

開発途上国を何とかしたい、その情熱をエネルギーに全力で駆け抜けている、そんな山口さんの生き方です。

彼女の現在を支えたのは、やはり高校時代の部活での頑張りではないでしょうか。山口さんが不良だったとは信じられませんが、彼女を更生させてくれたのは柔道です。その後の彼女の人生の頑張りも、柔道の苦しい練習に耐えた精神力や体力があるからだと思います。いわば、柔道で培った分人が、彼女の頑張りを支えているのだと思います。

また、山口さんが工業高校から慶応大学に進学したというのも通常では考えられない進路です。普通だったら、進学を諦めたことでしょうか。並大抵の努力では不可能ですが、精神力が、学業面での集中につながったのでしょうか。

さらに、その後の起業という生き方も、挑戦と努力の連続です。彼女は、迷う前に、まざり行動しています。しかし、その行動は単なる衝動ではありません。彼女の行動力は、自分の決定には自分で責任を取るという責任感に裏付けられたものです。自分の決めた進路ですので、どんな困難に出会っても決してあきらめません。すべてにおいて、自分が夢中になり、一生懸命になれることに全力を尽くすという点で一貫しています。

また、がむしゃらに頑張っているだけではありません。起業後、会社は発展し、利益を挙げています。バッグのデザイナーでありながら、有能な経営者としての視点も持っています。これも、学問として学んだ理論ではなく、山口さんの経験から体得したものだと思います。

皆さんの未来は、本当に分かりません。山口さんにしても、高校時代、自分がバッグの会社を起業し経営している夢を持っていたかというところではないでしょう。目の前にあることに夢中になり、諦めず、何でも一生懸命取り組んでいるうちに、自分が想像もしていなかったような未来が開けたという方が近いかもしれません。しかし、多くの中高生は、夢を持つ前に自信喪失に陥りがちです。特に、成績などの現実的な数字に直面していると、「どうせ自分なんか」というマイナス思考に陥ります。でも、長い人生です。中高生という時代は、土を耕し、せっせと養分をため込んでいる時です。将来、自分にどんな芽が出て、どんな花が咲くか、誰にも分かりません。今は、自分の中の、様々な分人を大切に、じっくり育てていってください。念ずれば、必ず花が開きます。マイペースで構わないのです。焦らずにいきましょう。

○参考 山口絵里子 「裸でも生きる」講談社BIZ(2007)

「裸でも生きる2」講談社BIZ(2009)